組織行動研究

No. 16

編集後記にかえて

●佐野が定年退職し，南が特別研究期間をとったので，槇田が編集を担当することになった。

これも遠からず定年退職になるので過去10年程つづけてきたいくつかの研究をまとめて，研究者生活にキリをつけようと，ここ何年か怠け者の己をはげまし乍らやっているところである。幸いにして何人かの若き俊英の協力を得て，2～3年の中にはなんとかまとめる目安がつきかけたところである。

そんな次第なので，少時く，槇田の編集で，パーソナリティがらみの研究を掲載することになると思う。

●NO. 25 は自我に関する実証的研究である。いわゆる自我の問題はパーソナリティの中心的問題であり，心理学にとっても最も基本的な問題である。が，最も扱いにくい分野であり，オーソドックスな心理学の主流である実験心理学者が排析？(敬遠？)してきた問題である。勿論，臨床家にとっては喫緊の問題であり，自我心理学そのものであるが。

一方，社会心理学では，自己意識，対人認知，IPT (Implicit Personality Theory)などについての実証的研究がなされるようになってきた。

実験社会心理学の台頭である。このような，自我の実証的な研究によく使われる概念に「自己概念」(self-concept)，「自己像」(self-image) がある。そして，それらを測定するための技法として“評定法”，“Q分類法”，“自由回答法”などがある。

WAI (Who Am I?) 又は TST (Twenty Statements Test) も，そのような目的に使用されてきた技法の1つである。

併し，著者はかねてから SCT (Sentence Completion Test) を補完する道具としてパーソナリティの診断に使いたいと思い，折にふれて試用してきた。そして，本格的にとりあげたのが 83 年である。爾来，88年までの先行研究をひとまず，まとめたものが本論文である。

5～6年で一応基礎的部分の構築は終ると思って始めたのが大仕事になってしまった。これも，いつものクセでつい凝りすぎたが，オカゲで収獲もあった。もう2～3年すれば，少々ユニークなパーソナリティ診断法がテスト・バッテリーに加えられそうである。つづきは90年，91年のモノグラフに掲載する予定。乞御期待！といった所である。　　(槇田　仁)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ
組織行動研究（第16号）
責任編集　槇田 仁・南 隆男

KEIO STUDIES ON ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND HUMAN PERFORMANCE No. 16
APRIL 1990

発行　〒108 東京都港区三田2—15—45
慶應義塾大学産業研究所
電話 03—(453)—5640(直通)
<平成2年4月30日>

印刷　〒104 東京都中央区八丁堀3-21-3
株式会社国際印刷
電話 03—(553)—2051(代表)
<平成2年4月23日>